

つじうら売りのおばあさん

小川未明

青空文庫

ある日、雪のはれた晩がたでした。

「きようは、義雄さんの家のカルタ会だ。」というので、みんなは喜んでいました。

達夫くんは、おとなりのかね子さんをさそって、いくことになっていました。

入り日が、赤く雲をそめて西にしずみますと、雪のつもった山のかげがまっ黒になって見えました。いよいよ出かける時分には、雪の上がこおって、歩くとさらさらと音がしたのです。

「このあいだ、僕の家のカルタ会でお顔に、すみをぬられなかったのは、かね子さん一人だけだろう。かね子さんは、えらいなあ。」と、達夫くんは今夜また負けて、おしろいやすみをぬられるのかと思うと、なんだか自分はいつも負けて、はずかしい気もちがしました。

「達夫さん、私と組みになりましたよね。私ひとりでたくさん取るからいいわ。あんたは自分の前だけよく見ていらつしやいね。」と、かね子さんはいいました。

しかし、達夫くんは女なんかからかばわれるのを、名譽とは思わなかったのです。

「僕、カルタには負けるけど、すもうを取ればいちばん強いんだがなあ。」と、歩きなが

ら達夫くんは力みました。

その晩のカルタ会は、なかなかにぎやかだったのです。カルタにつかれた時分、おすしや、あまぎけや、みかんや、お菓子などが出ました。それを食べてからあとは、火鉢をかこんでお話に花がさいたのでありました。

「つじうら売りのおばあさんの顔を見た人がある？」と、だれやらがいうと、たちまちその話でもちきりになりました。

このごろ、町の方から毎晩、雪のふるときも、風のふくときも、かかさずに村へはいってくるつじうら売りがあります。その声を聞いただけでは、女らしいが、なかには男だというものもあり、またおばあさんだというものもあれば、まだ若い女だというものもあって、うわさがとりどりでありました。まれにつじうらを買ったものも、ちようちんの火でははつきりすがたさえわからないのに、頭から布をかぶって顔をかくしているというのでした。

「まだ、今夜はやってこないね。」と、一人がいうと、

「どうして今夜はこないのだろう？」

「いや、もうじきにくるだろう。」と、おばけかなんかのように、そのつじうら売りの正し

体ようたい がわからないので、気味きみわるがっていたのです。

「きたら、だれか出て買かわないかな。」と、義雄よしおくんがいました。

「いちばんカルタに負まけた人ひとが、出て買かうことにしよう。」と、勇二ゆうじくんがいました。

「だれだろう?」と、みんなはおたがいの顔かおを見みまわしました。

そして、いちばん、すみやおしろいの多おほくついていいる顔かおを、さがし出だそうとしました。

「ああ、達夫たつおさんだ。」と、女おんなの子この一人ひとりがさけぶと、

「達夫たつおさんだ!」

「達夫たつおくんだ!」と、口々くちぐちにいつて、いちばんすみやおしろいのたくさんついているの

は、達夫たつおくんにきまったのでした。

「ただ、つじうらを買かったばかりではおもしろくないから、女おんなか男おとこがよく見みとどけること

にしようじゃないか?」と、まただれかが難問なんもんを出だしたのであります。

「さあ、たいへんだ。達夫たつおさん、できて?」と、義雄よしおくんのお姉さんねえが美うつくしい顔かおで笑わらいな

がらおつしやいました。

そういわれたので、達夫たつおくんは顔かおが赤あかくなりました。なぜなら、日ひごろから自分じぶんは強つよい

のだと自信じしんしているだけに、いまさらはずかしくもできないなどと、弱音よわねをはきたくはな

かったからでした。

「達夫さん一人では、可愛いそうだわ。」と、かね子さんがいいました。

「じゃ、かね子さんもいつしよにおいきよ。」と、だれかがからかいました。

「私、こわいわ。」と、かね子さんは身ぶるいました。

ちようど、このとき、風の音がして、そのあいまにとおくの方で、「つじうら、つじうら。」という声がしました。

「ほら、きた！」と、みんなは恐しさ半分、おもしろさ半分に、おどりがりました。

「僕、いこうか？」と、達夫くんは小さい声で、かね子さんにいうと、

「私もいつしよにいくわ。」と、かね子さんは、小さい声で答えました。

「いいよ、僕ひとりで。」と、達夫くんは強くなりました。

「つじうら——つじうら。」

だんだんその声は近くなつて、もうまもなく、この家の前にきかかっていました。

「僕、つじうらを買ってくる！」と、ふいに達夫くんは立ちあがりました。

「えらいなあ！」と、なかにはびっくりして、声をたてるものもあります。

達夫くんは、さむい星ばれのした外に出て、戸口に立っていました。やがて、あわれな

黒^{くろ}いかげがとぼとぼと雪^{ゆき}道^{みち}をちようちんの火^ひでたどつてくると、もう恐^{おそ}ろしいなどということを忘^{わす}れて、

「おじいさん、つじうら……。」といって、おあしを出^だしました。

あわれなかげは、立^たちどまりました。暗^{くら}いちようちんの火^ひは、わずかに、しなびた手^てをてらししました。

「おじいさんではありません、おばあさんですよ。坊^{ぼっ}ちゃん、さむいからかぜをひかぬようになさい。」

そういつて、そのあわれなかげは、またとぼとぼといつてしまいました。

達^{たつ}夫^おくんは、目^めの中^{なか}にあついなみだのわくのをおぼえました。そしてしばらくそのうしろすがたを見^みおくと、

「つじうら——つじうら。」と、そのおばあさんの声^{こゑ}がたよりなく風^{かぜ}に消^きえていきました。

このとき、にぎやかな家^{うち}の中^{なか}から、

「達^{たつ}夫^おさん。」「達^{たつ}夫^おさん。」と、みんなが自^じ分^{ぶん}の名^なをよんでいるのがきこえました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷

1983（昭和58）年1月19日第6刷

※表題は底本では、「つじうら売《う》りのおばあさん」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2015年5月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

つじうら売りのおばあさん

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>